

## 第 20 期生 三田祭論文プロジェクト紹介

第 20 期生 新田 奈央

既存研究によれば、一人称視点の静止画は、内部評価思考を生起させ、促進焦点傾向の消費者の製品評価を高める一方、三人称視点の静止画は、外部評価思考を生起させ、予防焦点傾向の消費者の製品評価を高めるという。しかし、動画はこの議論の対象となっていない。本論は、研究対象を動画に拡張し、出演者の顔出しの有無を追加的に考慮したうえで、いかなる動画が内部（／外部）評価思考を生起させやすいのか、そして、いかなる動画が促進（／予防）焦点傾向の消費者の製品評価を高めるかを探究する。

### ◆研究について

私たち第 20 期生は、8 人全員で 1 つの論文を執筆しました。自分たちに身近なものを研究したいという思いから選んだテーマは、「商品紹介動画」。例年の三田祭論文プロジェクトと大きく異なる点は、自分たちで商品紹介動画を制作し、実験を行ったことでした。世の中に投稿されているあらゆる商品紹介動画を参考にしながら、商材や台本、出演者の動きまで細かく議論し、2 つの商材×3 つの視点の計 6 つの動画を制作しました。動画の撮り直しが発生するなど、大変なこともたくさんありましたが、同期全員で楽しみながら取り組むことができました。

### ◆慶應マーケティングゼミ合同研究報告会

三田祭期間の 11 月 20 日、三田キャンパスにある南校舎ホールで慶應マーケティングゼミ合同研究報告会（マケ論）が行われました。発表順が 1 番最後だった私たちは、緊張しながら他ゼミの発表を拝聴し、自分たちの出番を待ちました。

新家のアナウンサーにも劣らない美声で、私たちのプレゼンはスタートしました。

新家が聴衆を惹きつけた後

は、中村と國武が落ち着いた声で既存文献パートを丁寧に紹介し、仮説パートへマイクをつなぎました。仮説パートの前半では、松崎が明るく安定した話し方で聴衆を魅了し、後半では、複雑なロジックを有田



終了後に小野先生、高木様、竹内先生と記念撮影をしました。

が完璧に解説しました。私は、坪井と実験パートを担当し、約半年間の努力の結晶である実験結果を、自信をもって発表しました。そして、最後に二宮が堂々とした態度で研究の成果をまとめ、プレゼンは終了しました。質疑応答では、分析や実務的貢献に関する質問があり、中には想定していなかった質問もありましたが、前日の夜に小野先生と行った練習の成果を発揮し、同期一丸となって臨機応変に回答することができました。質疑応答を終え、降壇して自分の席に戻ったとき、無事にプレゼンを終えることができた安心感と共に、大きな達成感を感じました。三田祭論文プロジェクトの中でも、小野ゼミでの成長を特に実感した1日でした。

#### ◆献本セレモニー

三田祭論文の執筆が終わった後、大学院生にお力添えを頂き、第20期生は執筆した論文の製本を行いました。そして、ある本ゼミの日、1年間の感謝の気持ちを込めたメッセージカードと共に、製本した論文を小野先生と先輩方に献本させていただきました。小野先生宛てのメッセージカードは、1番最



セレモニー後に小野先生、先輩方と記念撮影をしました。

初に実験用動画を撮影した際に商材として取り上げた、COMPACT というファイルに入れてお渡ししました (A4の書類を半分のサイズで持ち運ぶことができる便利なファイルです。気になる方はぜひ調べてみてください)。小野先生にも先輩方にもとても喜んでいただけて、第20期生もとても嬉しかったです。

#### ◆活動後期

6月から始まった初めての研究活動は、論理性を追求する難しさを痛感する日々となりました。長時間、頭をフル回転させて議論をしても全く収穫を得られなかったり、時間をかけて生み出した方法がうまくいかず、状況が一瞬にして振り出しに戻ってしまったり、論文執筆において自分たちが示したいことをわかりやすい表現で言語化できなかつたりと、自信を失いそうになった瞬間が多々ありました。それでも、私たち第20期生が、三田祭論文プロジェクトを無事に終えることができたのは、長期にわたって手厚くご指導して下さった小野先生、昼夜問わず相談に乗って下さった大学院生の方々、ならびに第19期生の先輩方のお力添えのおかげです。皆様のお力添えなくして、第20期生の三田祭論文プロジェクトが成功することはありませんでした。第20期生一同、支えて下さった皆様に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。